



Title	Mothers and Daughters : Reproduction Issue in the Works of Edith Wharton and Theodore Dreiser
Author(s)	吉野, 成美
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43324
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	吉 野 成 美
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 6 9 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 14 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科英文学専攻
学 位 論 文 名	Mothers and Daughters: Reproduction Issue in the Works of Edith Wharton and Theodore Dreiser (娘から母へー イーディス・ウォートンとセオドア・ドライサーの作品における女性の妊娠)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 森岡 裕一 (副査) 教 授 玉井 璋 助教授 服部 典之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀初頭の同時代に活躍しながら、アメリカ文学史上全く異なる流れに属するとされてきたイーディス・ウォートンとセオドア・ドライサーという二人の小説家を取りあげ、女性登場人物が直面する妊娠とその影響に焦点をあて、娘から母になること、及び、母にならない/なれないことの社会的文化的意味を検証している。論文は序章、本論全5章、結論から構成され、全体で英文191頁、和文400字詰め原稿用紙に換算して約350枚の論文である。

ウォートンは、妊娠を婚姻制度という既存の枠組の延長線上でとらえるのに対し、ドライサーは妊娠をあえて婚姻の枠組から外すことにより、女性が生殖と制度の板ばさみになることに物語の主題を見出している。婚姻制度と妊娠を必然的に結びつける前者の作品には自然と文化の狭間におかれる人間のあり方をその主な研究対象とする文化人類学の影響が顕著であるが、そこでは、女性が父親から夫へと贈与される父権的な枠組に屈するのではなく、むしろその枠組にいかに対応していくか、その方策として女性の生き方の可能性を母親になるという選択肢を中心に問うている。一方後者は、そうした枠組そのものを疑問視するところから出発し、婚外妊娠に遭遇する女性を描くことで、彼女達が直面する生殖と制度の狭間にある矛盾に焦点をあてている。

第1章では、ウォートンの『無垢の時代』において、財産交換の手段とされる筈の女性達が、家と家、父と夫の境界線を越え、強固な母系制共同体を形成していること、また、母系制社会の中心に位置する主人公の妊娠及び出産は、男性のロゴス中心社会の産物である「言葉」によって自己を表現することを阻まれた彼女が、自身の身体をテキストとし、その上に血を流して自分の物語を書く、すなわち、自らの肉体を賭して発するメッセージとして機能していることが明らかにされる。

第2章では、ウォートンの『お国の風習』において、ヒロインの4回の結婚を、彼女の父親代理探求物語として読む立場から、一児の母親になりながら、それを否定している姿に、いつまでも娘として父親の庇護下にとどまろうとする願望、及び、実父への精神的、社会的、金銭的關係、さらに、彼女をとりまく三人の男性との間の金銭的な流れ、精神的關係に見出されるヒロインの父親依存の傾向が、父権社会を生きぬくための戦略となっている点を指摘している。

第3章では、ウォートンの『夏』において、主人公と義父の近親相姦の父娘關係が、社会家族制度と生物学的生殖との狭間で起きた極めて特異なケースである点を立証し、婚外妊娠を巧みに利用することによって養父との性的關係を阻止する盾を得ると同時に、彼との表向きの婚姻によって制度内における自身の存在理由を確立しようとするした

たかなサバイバルの意図と計算があったことを明らかにしている。

第4章では、ドライサーの『ジェニー・ゲルハート』について、家庭の天使と家庭外に位置する娼婦という二項対立の狭間で、家族内での母と娘、妻、姉という女性に割り当てられる複数の役割に柔軟に対処し演じわけるヒロインが、制度としての家族、階級を超え、決められた役割にとらわれない斬新性を備えていることを論じる。自らの体を資本に男性の囲われ者となることで一家を経済的に支えんとする彼女の戦略は、一度道を踏み外した娘が父の庇護下から永遠に追放されるという従来のボタンとは異なったユニークなものとなっている点を指摘している。

第5章では、ドライサーの『アメリカの悲劇』において、婚外妊娠と社会制度の狭間で苦しみを余儀なくされる女性特有の問題に作家がどのように挑んだかを、ロバータ・オルデンの家族内、階級間における立場の曖昧性を分析することで明らかにし、中絶を求めつつ果たせなかった彼女の状況を検討することを通して、本作品を主人公の男性クライドの悲劇としてではなく、ロバータの悲劇として読み解くことを試みている。

以上の分析をふまえ、女性登場人物たちが経験する生物学的な身体変化は一樣に、政治的なメッセージを持っていること、そして、それは、男性と女性、個人と社会、そして自然と文化という様々な二項対立の狭間の矛盾点を我々読者に問いかける重要なプロットの一つであると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

従来の英米文学研究において家庭内における娘の役割については研究されているが、父から夫へと贈与される客体としての女性像から逸脱し、主体的に男性と関わり、妊娠をいわば交渉材料として利用する女性主体に注目した本論文の切り口は新鮮で、20世紀アメリカ・リアリズム小説研究に新境地を拓くものとして高く評価することができる。また、徹底した読みに基づく個々の作品の分析自体優れた作品論であるのみならず、従来、散発的な言及しかされてこなかったウォートンとドライサーを架橋する新たな視点を導入した功績は大きい。

ただし、本論文に問題がないわけではない。取り上げられている作品間で妊娠モチーフの重要度においてばらつきがあるし、アメリカ史のコンテクストへのさらなる掘り下げがあればより議論が深まったであろう。また、論述に繰り返しの多い個所が散見されることも惜しまれる。

しかし、これらの点は望蜀のごときもので、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。